

令和8年度全国学力・学習状況調査 新篠津村における調査結果

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、

○全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

○学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

○そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象

○小学校6年生の児童及び中学校3年生の生徒

(3) 調査事項

①児童生徒：教科調査〔国語、算数・数学、英語（中学校のみ）〕 / 質問調査

②学 校：質問調査

(4) 調査問題

①教科に関する調査

○学習指導要領で育成を目指す、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題を出題。

○「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善のメッセージを発信。

②質問調査（生活習慣や学習環境等に関する項目）

○児童生徒に対する調査：学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査。

○学校に対する調査：指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備状況等に関する調査。

(5) 今年度の調査の特徴

○中学校・英語〔4技能（聞くこと・読むこと・書くこと・話すこと）〕の全面 CBT（Computer Based Testing）化 ※「話すこと」調査のみ令和5年度も CBT で実施

○小学校・児童質問でのランダム方式の導入

(6) 調査の方式

悉皆調査

(7) 調査実施日

①教科に関する調査

○小学校：令和8年4月23日（木）国語・算数

○中学校：令和8年4月20日（月）英語

令和8年4月23日（木）国語・数学

②質問調査

○小学校：令和8年4月28日（水）

○中学校：令和8年4月20日（月）

(8) 調査対象学年及び調査を実施した児童生徒数

	対象学年	実施学校数（校）	児童生徒数（人）
小学校	第6学年	1	17/19
中学校	第3学年	1	17/19
合 計		2	34/38

2. 新篠津村内の状況及び改善方策

(1) 全国学力・学習状況調査の概要

・全国及び全道の平均正答率と比較して、下の5段階で評価しています。

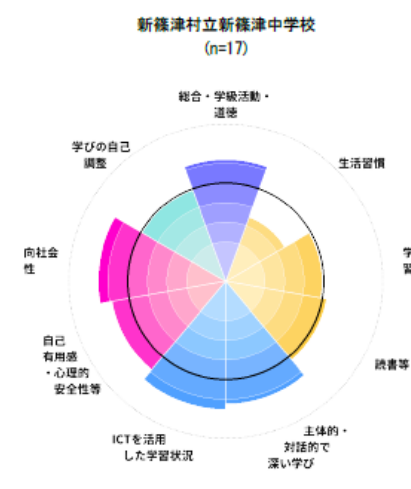
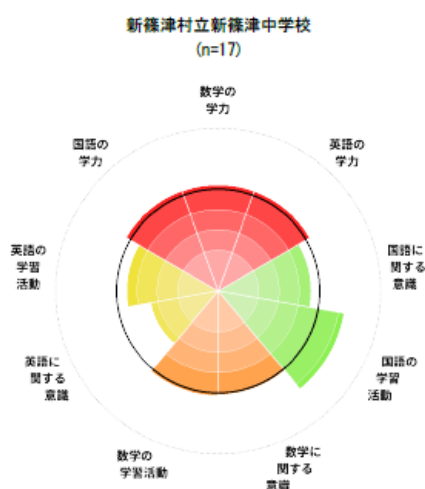
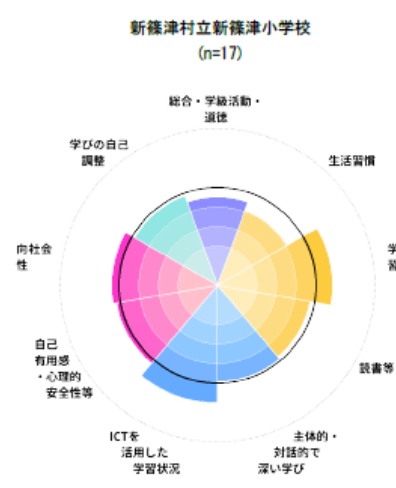
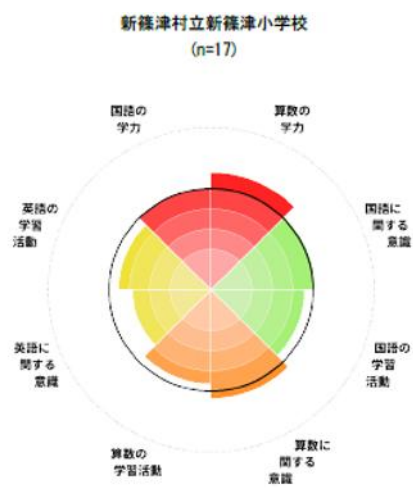
	小学校		中学校		
	国語	算数	国語	数学	英語
全道比較	同様	やや高い	同様	同様	同様
全国比較	同様	やや高い	同様	同様	同様

・標語の基準は以下のとおりです。〔国語・算数（数学）と英語の数値の出し方が異なります〕

標語	国語、算数・数学	英語
高い	9ポイント以上	4.5ポイント以上
やや高い	3ポイント以上	1.5ポイント以上
同様	±3ポイント未満	±1.5ポイント未満
やや低い	3ポイント以下	1.5ポイント以下
低い	9ポイント以下	4.5ポイント以下

〔全国との比較 教科の学力・学習状況〕

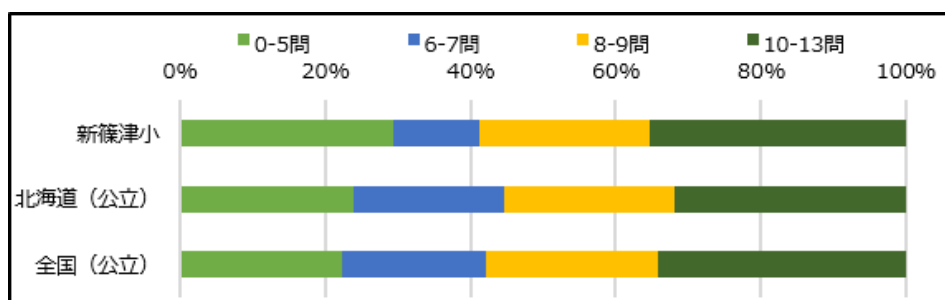
〔全国との比較 その他の学力・学習状況〕



(2) 教科に関する調査の概況

①小学校【国語】

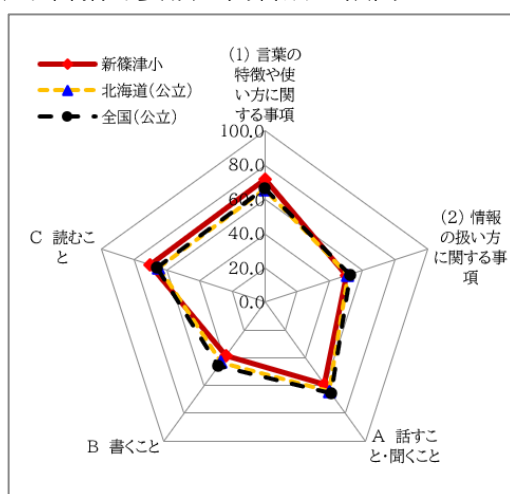
◆児童の傾向



正答 10 問以上の層が全体の 35.3%を占めており、北海道や全国と比べて高いです。正答 5 問以下の層は全体の 29.4%を占めています。特に「5 問」の割合は、北海道や全国の 2 倍以上の出現率となっており、この層への個別の支援が課題と言えます。肯定的な側面として、正答数が 3 問以下の児童が 0 名であることが挙げられます。基礎的な部分で極端につまずいている児童はいないことが分かります。

標準偏差は 2.6 で、北海道や全国 3.0 よりも小さく、分布が一定の範囲内に収まっていることを示しています。

◆学習指導要領の内容別の傾向



1. 正答率の高い領域（強み）

○漢字の読み書き

「みじかい」「ふしぎ」の書き取りは、全国や北海道の平均を大きく上回っており、漢字の定着は非常に良好です。

○文章の要旨把握と意見の記述

文章の全体像を捉えたり、自分の考えを文章にまとめたりする力は、記述式であっても高い正答率を示しています。読解力の高さは大きな強みと言えます。

2. つまずきの多い領域（課題）

●書くことの構成や工夫

「筋道の通った文章となるよう全体の構成や展開を考える」「自分の意見を述べる」ことはできていますが、「引用」や「論理的な構成」といった記述スキルにつまずきが見られます。

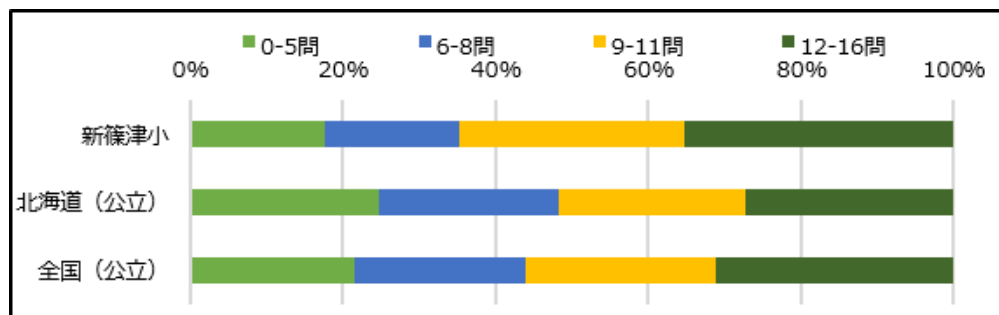
「考えを支える理由や事例など情報の関係を理解する」「文章内の情報がどのような論理的つながり（理由や事例）になっているかを読み解く」といった情報の論理的関係の理解に課題がみられます。

●音声情報の活用

「動画の資料を活用して自分の考えが伝わるよう工夫する」「提示された資料をどう表現に活かすか」という問題で正答率が伸び悩んでいます。

②小学校【算数】

◆児童の傾向

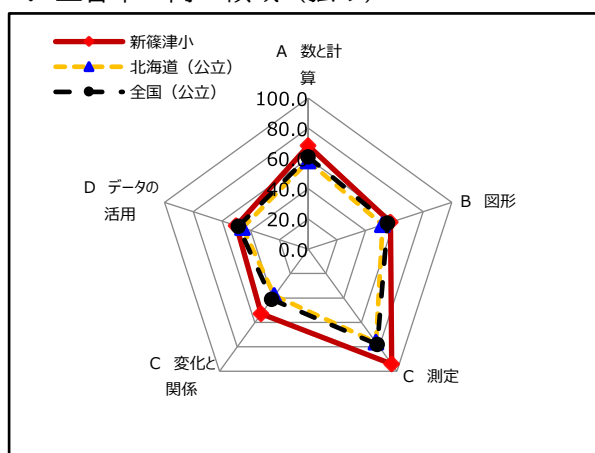


最も正答数が多い12問以上の層に属する児童の割合が約35.3%に達しています。12問正解は11.8%で、これは全国や北海道の同層の割合と比較しても高く、上位層の厚さが全体の結果を押し上げています。

特筆すべき点として、正答数が0問から4問までの児童が一人もいないことが挙げられます。最も低い層でも5問正解であり、それ以下の層がないことから、基礎的な学力の底上げがなされている傾向が読み取れます。「5問」の層を引き上げていくことで、集団のさらなる底上げが期待できます。

◆学習指導要領の内容別の傾向

1. 正答率の高い領域（強み）



○「数と計算」領域

「3枚のカードを並べて最も大きい小数を作る問題」では、正答率100%を達成しました。「数直線上の単位分数から1の位置を捉える問題」でも高い理解度を示しました。

○「変化と関係」領域

「百分率から基準量を求める問題」で全国平均を上回る高い理解度を示しました。

2. つまずきの多い領域（課題）

●「データの活用」領域

「二つの条件が重なる人数を表から読み取る問題」は、正答率が本調査の中で最も低くなっています。複雑な情報の整理に課題があることが伺えます。

●「図形」領域

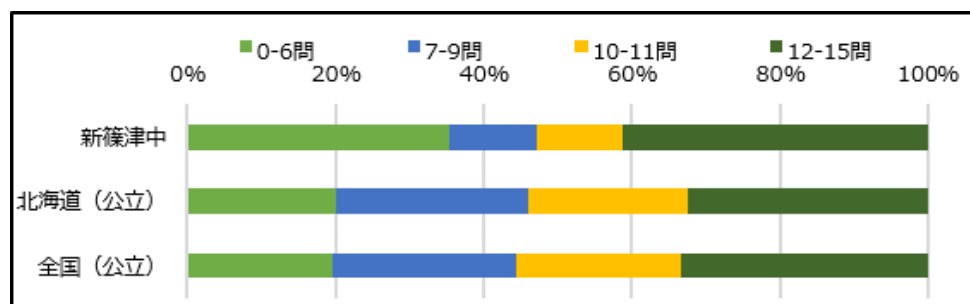
「単位立方体（1cm³）の個数から体積を捉える問題」の正答率は41.2%に留まりました。公式を用いた計算は得意ですが、体積の本質的な理解に課題が見られます。

●理由の記述

「二つの広場の混み具合を比較する式の意味を判断する問題」は、全国よりは高いものの、5割を下回る結果となりました。

③中学校【国語】

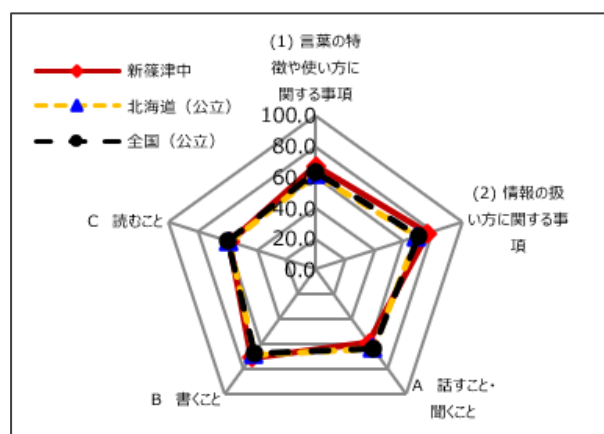
◆生徒の傾向



高い正答数の層と低い正答数の層に分かれる「二極化」の傾向が見られます。特に14問正答した生徒は全国平均や北海道平均と比較して非常に高い割合です。一方で、6問正答や5問正答の層にも生徒が分散しており、全国平均と比べてこれらの層の割合が高くなっています。集団内での正答数のバラつきが比較的大きく生徒間の習熟度に関きがあるという傾向が見取れます。

◆学習指導要領の内容別の傾向

1. 正答率の高い領域（強み）



○「情報の扱い方に関する事項」

正答率は全国平均や北海道平均を大きく上回っています。特に、「話し合いの内容を整理したタブレット端末の画面を説明する問題」で高い正答率を示しました。

○「書くこと」

「気持ちがより伝わるように表現を工夫して書く記述問題」では正答率が100%に達しており、表現の工夫において高い能力を示しています。

います。

○言葉の特徴や使い方（知識・技能）

「可能の意味」を問う問題や、「ら抜き言葉」の判別といった、助動詞の働きや単語の活用に関する問題で、ともに高い正答率でした。

2. つまずきの多い領域（課題）

●「話すこと・聞くこと」および「読むこと」

ともに正答率は全国平均を下回っています。

●記述式の問題

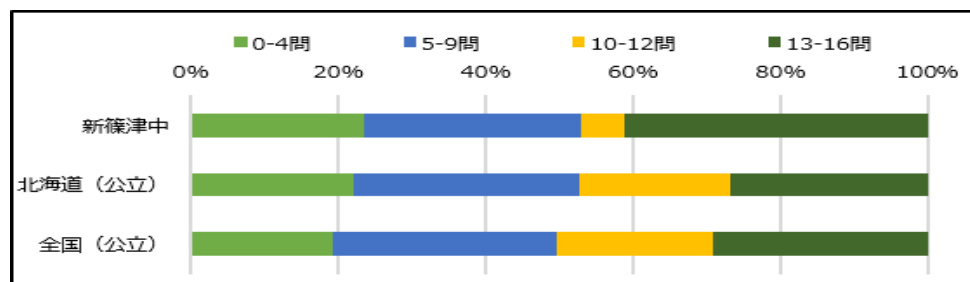
正答率は5割を切っています。特に、「二つの例文を比較して擬態語の効果を説明する問題」は正答率が低く、無解答も複数みられました。

●「話し合いを受けての自分の考えや、自分が書いた文章のよい点や改善点を書く」問題

の正答率は5割を切っています。

④中学校【数学】

◆生徒の傾向

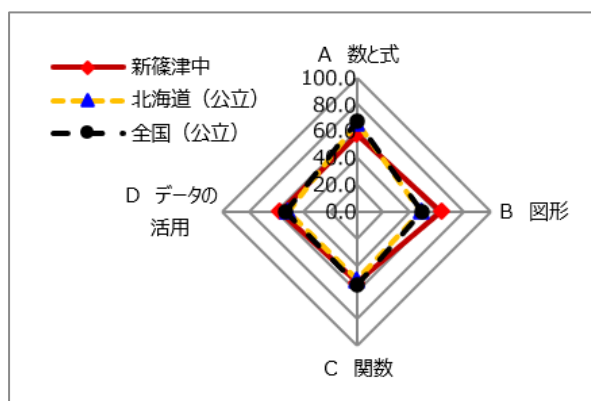


上位層が一定数存在する一方で、「中間の得点層が薄く、下位層まで幅広く分布している」という、学力の差が大きい傾向にあります。

最大の特徴は、高得点層の割合が全国や北海道の平均と比較して非常に高いことです。一方で、平均的な得点圏（中間層）に該当する生徒が極端に少なく、正答数が少ない層にも一定の生徒が分布しており、学力の二極化の傾向があります。下位層は全国平均よりも低い位置にあり、学習に課題を抱える生徒への個別の支援が必要な状況であると言えます。

◆学習指導要領の内容別の傾向

1. 正答率の高い領域（強み）



○「図形」領域

「思考・判断・表現」を要する問題において全国を大きく上回る高い成果を上げました。三角形の合同を基にした証明問題において、極めて高い正答率でした。

○「思考・判断・表現」

全国平均を大きく上回りました。単なる計算技能だけでなく、筋道を立てて考えたり説明したりする力に長けた生徒が多いと言えます。

○「データの活用」

「箱ひげ図と四分位数の対応を理解しているかどうかをみる問題」では、全国上回る正答率を示しました。

2. つまずきの多い領域（課題）

●「数と式」の基礎

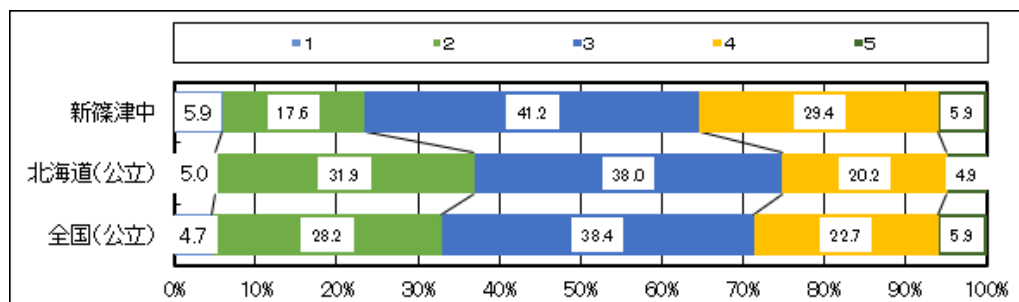
本来は得点源となるべき領域で全国平均を下回る課題が見られました。他の領域が全国平均を超えている中で、唯一の明確な弱点です。「同類項をすべて書く問題」は、全国平均を大きく下回っています。「負の数を含む反比例の値 ($x=-3$ のときの y の値) を求める問題」も苦戦しました。

●「問題解決の方法を説明する問題」

正答率が低く、無解答率も高い結果となりました。思考力は高いものの、複雑な手順を数学的に説明する場面ではつまずきが見られます。

⑤中学校【英語】

◆生徒の傾向



平均 IRT スコア（問題の難易度を考慮して受験者の能力を統計的に算出した数値）が全国や北海道を上回っている要因は、下位層が少なく上位層へ移行しているためと考えられます。基礎的な学力が定着しており、多くの生徒が中上位の力を備えていると読み取ることができます。

標準偏差でみると、生徒間のスコアのばらつきが他と比較して小さく、学力層が一定の範囲にまとまっている傾向を示しています。

◆学習指導要領の内容別の傾向

1. 正答率の高い領域（強み）

○聞くこと「概要・要点の把握」

「職場体験の発表を聞いて概要を捉える問題」「住みやすいまちづくりについての発表から要点を捉える問題」で全国平均を大きく上回る高い正答率を示しました。

○読むこと「必要な情報の抽出と要点把握」

「メールやウェブサイトから目的に応じて情報を読み取る問題」「文章の要点を捉える問題」で、全国平均を上回りました。

○書くこと「個人的な話題に関する表現」

中学生の思い出や、留学生としたいこととその理由など、自分自身の経験や考えを整理して書く力は非常に高いと言えます。

2. つまずきの多い領域（課題）

●書くこと「社会的な話題への意見と理由付け」

「インターネットの使用に関する文章を読み、自分の考えとその理由を書く問題」の正答率は低く、無解答率が高い結果でした。思考・判断を伴う記述において、書くこと自体に苦戦している様子が伺えます。

●書くこと「日常的な行動の正確な説明」

「学校で普段行うことについて説明を書く問題」では、正答率が極めて低く、基本的な表現を用いた説明に課題があるといえます。

●聞くこと「対話文やアナウンスの正確な聞き取り」

店員と客の会話やショッピングセンターのアナウンスなど、具体的な場面設定における詳細な情報の聞き取りは、全国平均を下回っています。

(3) 質問調査の概況

①「新しのつ めざす子ども像」の実現

本村では、令和3年度より小中一貫教育を進めています。その背景には次のような課題がありました。

①「将来の夢や目標を持っている」	肯定的回答：小 76.4% 中 55.5%
②「自分には良いところがある」	肯定的回答：小 82.3% 中 66.6%
③「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えたことがある」	肯定的回答：小 58.8% 中 58.9%
④「課題の解決に向けて、自ら考え、自分から取り組んでいる」	肯定的回答：小 82.3% 中 89.9%
⑤「自分の考えがうまく伝わるように工夫して発表している」	肯定的回答：小 88.2% 中 77.6%

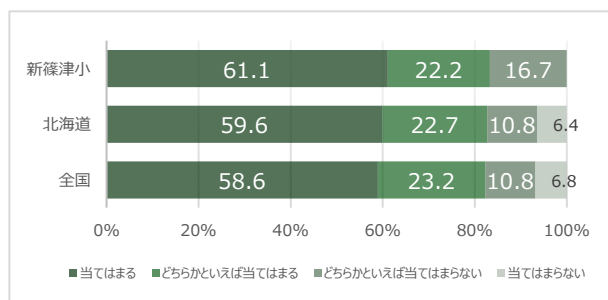
〔令和3年度全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙より〕

そのため、「新しのつ めざす子ども像」を、

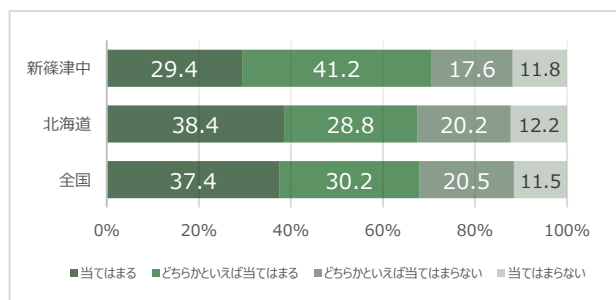
「ふるさとを愛し 夢や目標をいだいて 未来を切り拓こうとする たくましい子ども」

と定め、小・中学校が、9年間の系統性や連続性に配慮した一貫性のある教育活動を展開してきました。その成果は、今年度の調査結果からも見取ることができます。

「新しのつ めざす子ども像」の実現 将来の夢や目標を持っていますか



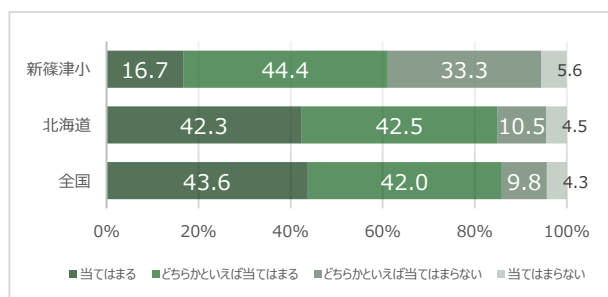
R3 肯定的回答：76.4%



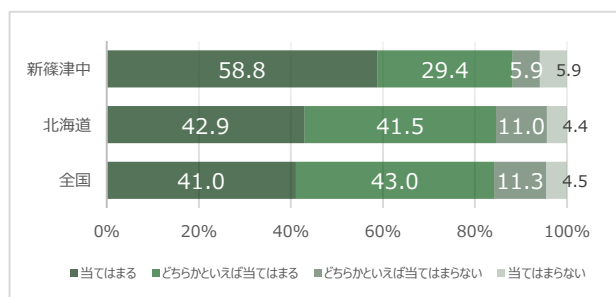
R3 肯定的回答：55.5%

小6・中3ともに、小中一貫教育開始当初よりも高い数値となっています。系統性を重視した「未来、地域探究学習」や「キャリア教育」を、継続的に取り組んだ成果が現れたものと考えられます。

「新しのつ めざす子ども像」の実現 自分には良いところがあると思いますか

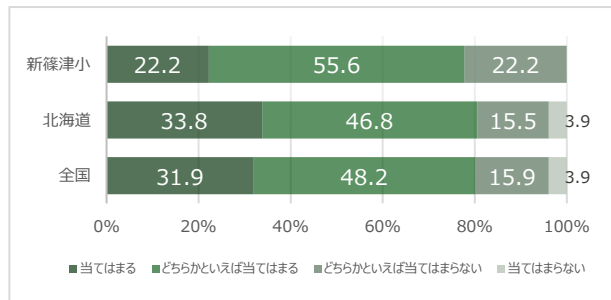


R3 肯定的回答：72.8%



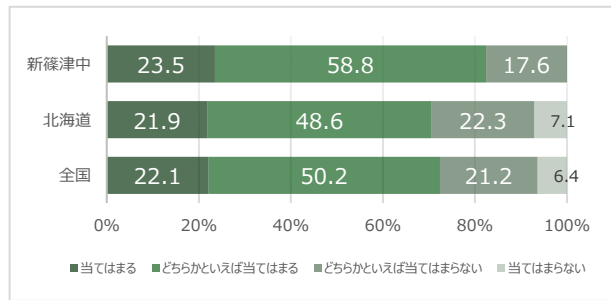
R3 肯定的回答：66.6%

小6は下がっていますが、中3の肯定的回答率は高くなっています。結果のみならず、子どもの姿を多くの人が見守り、努力や工夫のプロセスを認めるような「肯定的な関わり」を増やすことが求められていると考えます。

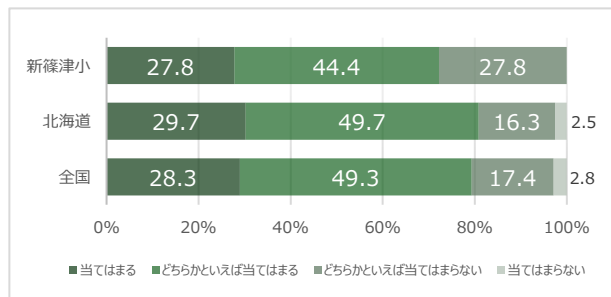


R3 肯定的回答：58.8%

小・中学校ともに小中一貫教育開始当初をはるかに上回る結果でした。地域の方々のご協力を得ながら工夫を凝らして実施した「地域探究学習」の成果が大いに現れました。中学校においては、全道・全国を大きく上回っています。

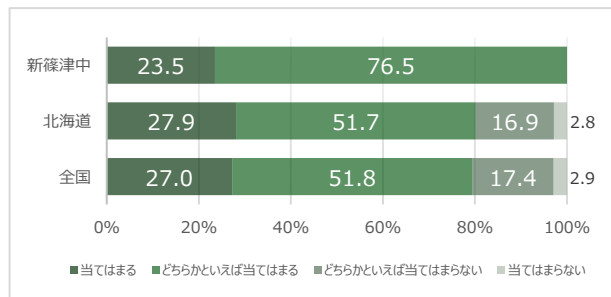


R3 肯定的回答：58.9%

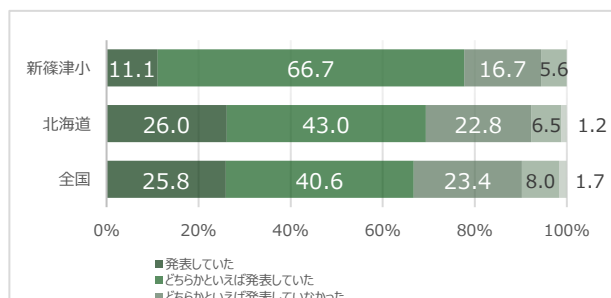


R3 肯定的回答：82.3%

小中一貫教育開始当初と比べ、小学校では-10.1ポイント、中学校では+26.1ポイント（肯定的回答率100%）という結果でした。先回りして答えを与えずに、子ども自身が考える時間と空間を確保すること、自分の問いや学習の見通しを持たせること、他者の意見に触れ、自分の考えを広げること等を大切に授業づくりが、今後さらに求められます。

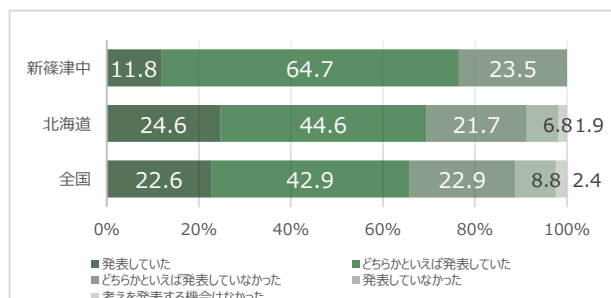


R3 肯定的回答：89.9%

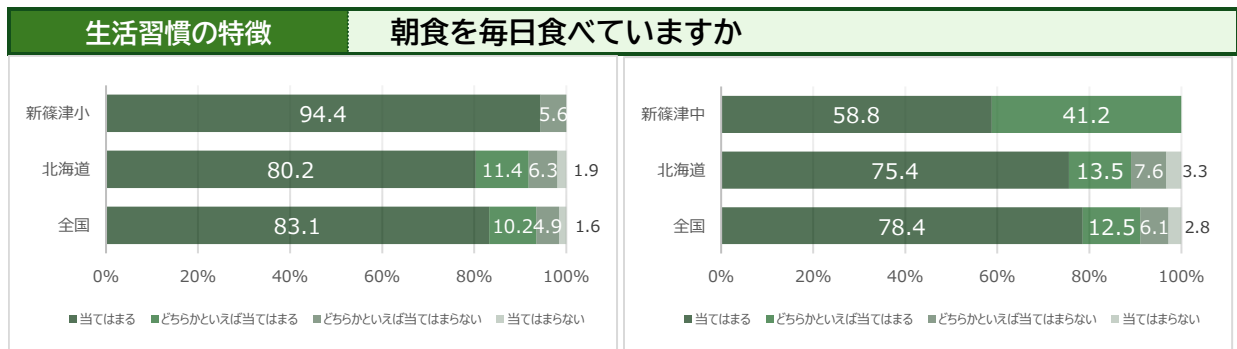


R3 肯定的回答：88.2%

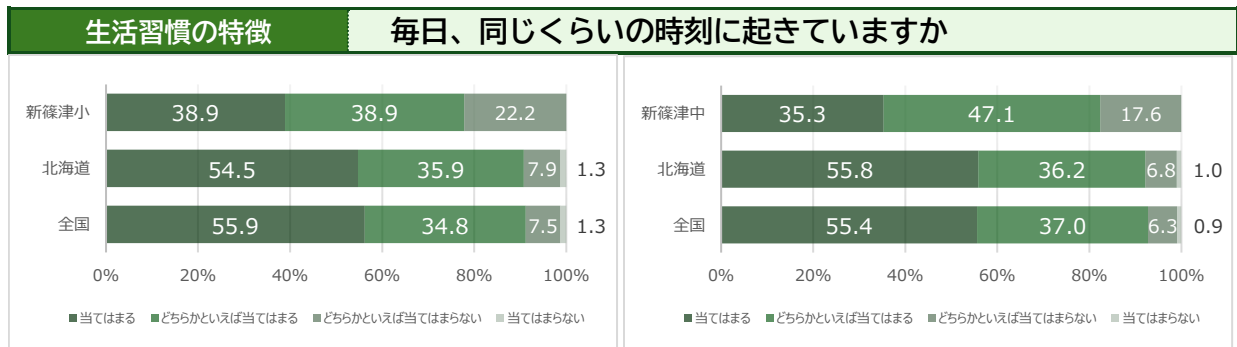
小中一貫教育開始当初と比べ、小学校では-10.4ポイント、中学校では+7.0ポイント（肯定的回答100%）という結果でした。「主体的・対話的で深い学び」の推進、ICT機器を活用した発表機会の増加、そして各教科における表現活動の重視等が教育活動に浸透しています。児童生徒の資質・能力の着実な向上を図るために、継続的に取り組むことが求められます。



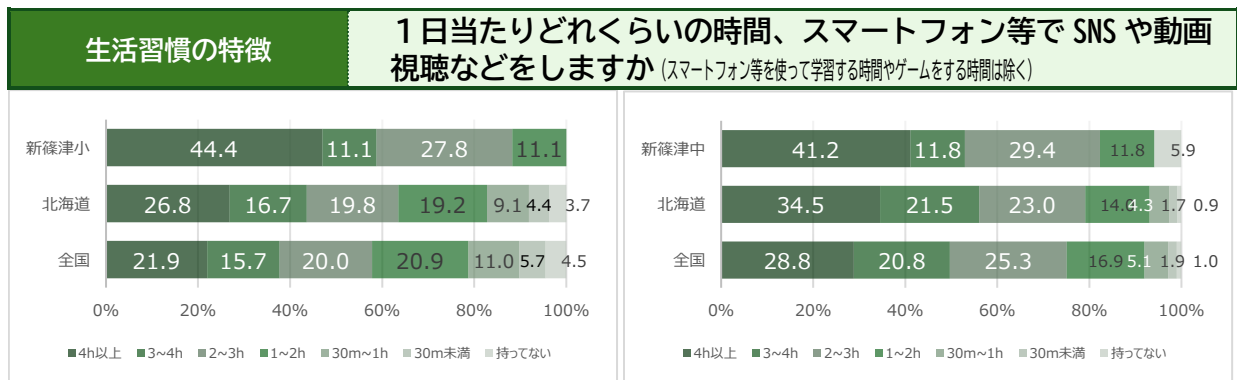
R3 肯定的回答：77.6%



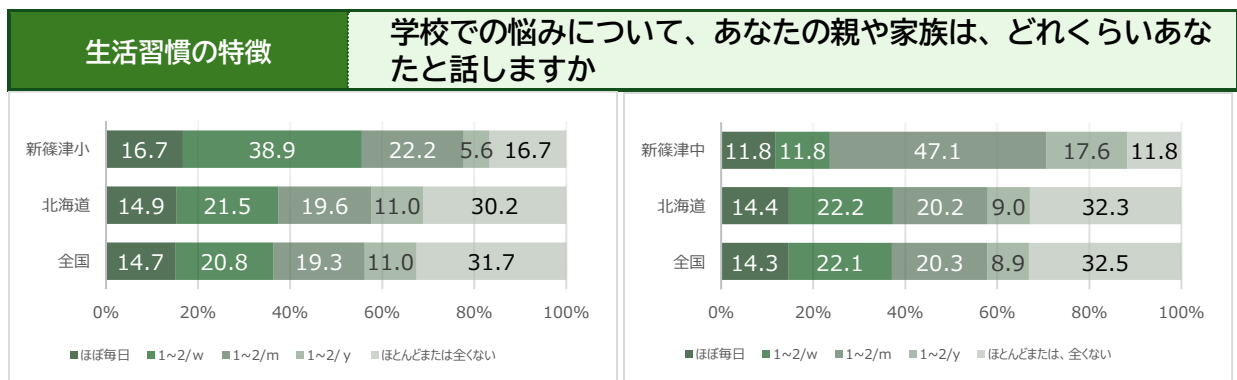
朝食の喫食については、小6・中3ともに高い肯定的回答率を示しています。



小6・中3ともに、北海道や全国の肯定的回答率よりも低くなっています。就寝時刻も同様の傾向です。家庭生活における生活リズムづくりが求められます。



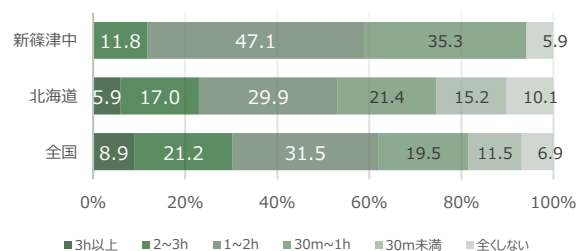
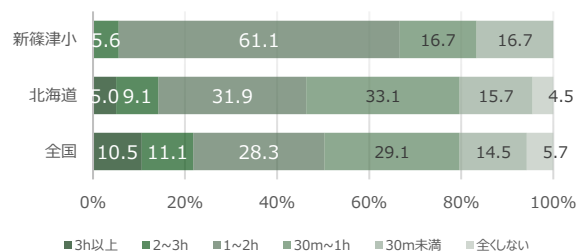
小6・中3ともに、スクリーンタイムが長い傾向にあります。特に児童全員が1日1時間以上利用しています。のぞましいスマホ等の利用と自己管理、ネットモラル等について、学校と家庭が連携して身につけさせる必要があります。



北海道と全国の平均を上回っています。勉強についても家庭で話す児童生徒が多く、家庭での精神的結びつきが強いといえます。ただ、「ほとんど、または全く話さない」と回答した児童生徒が一定数いることは看過できません。

学習環境・学習習慣の特徴

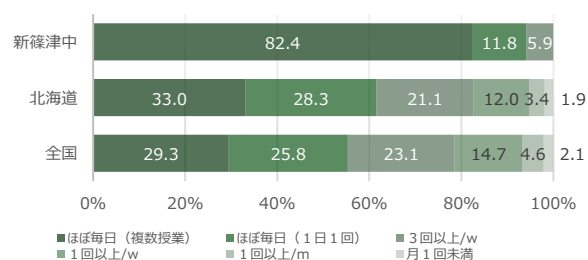
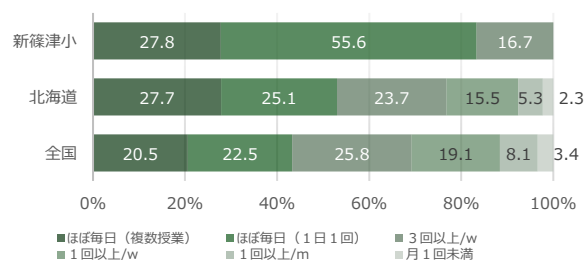
学校の授業時間以外に、普段（月～金）、1日どれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）



多くの小6・中3が1時間以上の学習時間を確保しています。一方で、長時間の集中を要する学習への移行には課題がみられます。

学習環境・学習習慣の特徴

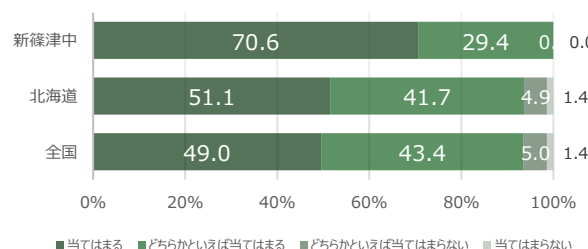
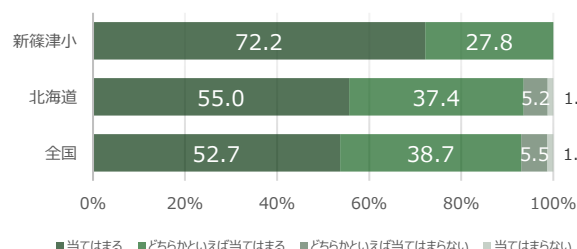
5年生（中1、2年生）までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか



小6・中3ともに全員が週に3回以上使用していると答えています。ICT機器を用いた「文章作成」や「プレゼンテーション作成」ができる」と回答する割合は全国平均より高く、授業や諸活動の中で使いこなす環境が整っていることがわかります。

学校生活と自己肯定感

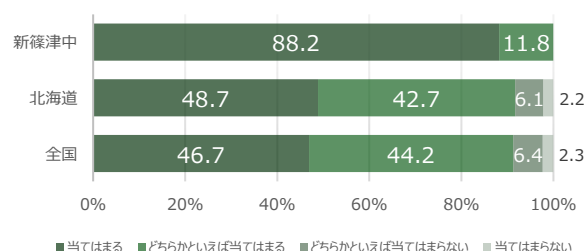
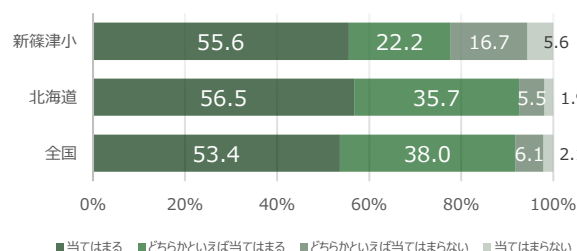
授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にしてお互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか



小6・中3児童全員が肯定的回答をしていました。他者の意見に傾聴して、協力しながら課題解決に挑む力が今後一層求められており、小・中学校ともに、それを踏まえた教育活動を推進していることがわかります。

学校生活と自己肯定感

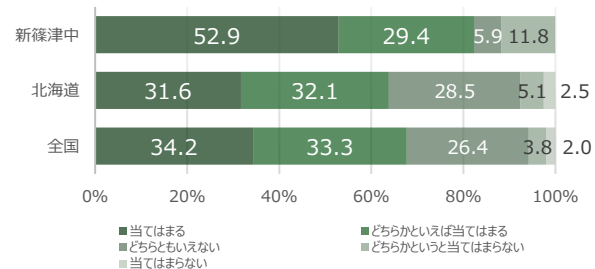
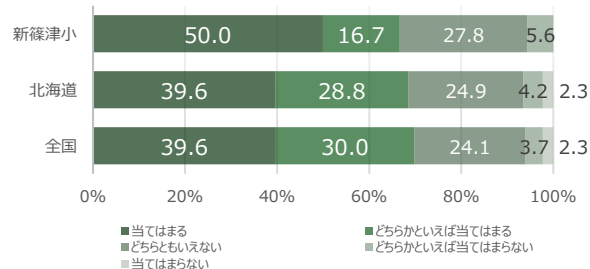
先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか



中3生徒全員が教員からの承認感を得ていることがわかりました。児童生徒と教員の関係をこう着させず、より多くの教員が児童生徒との関わりを持ち、一人ひとりの努力の過程を認めるような、学校全体の取り組みが大切です。

学校生活と自己肯定感

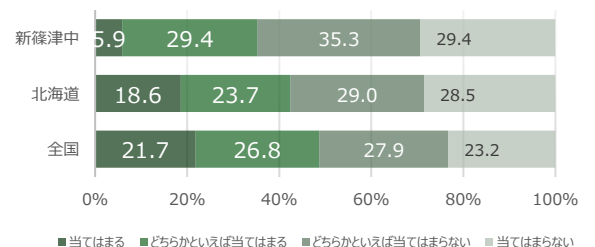
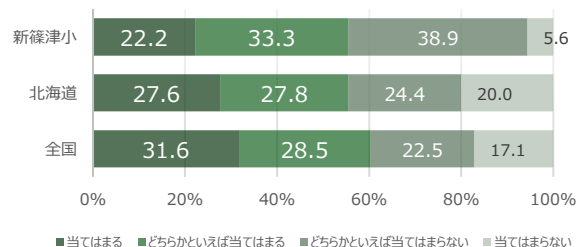
あなたの学級では、人と違う意見を言っても否定されないと思いますか



教室における心理的安全性を推察できる設問です。小6は全国・北海道と比較して肯定的回答率がやや低くなっています。一方、中3はとても高い肯定的回答率です。

教科の得意・不得意意識と実態

算数・数学の勉強は得意ですか



算数・数学を得意とする肯定的回答率は低いものの、実際の平均正答率は上回っていることから、「自信と実力のギャップ」があると考えます。他の教科についても同様の傾向です。現状の可視化、スモールステップによる成功体験の蓄積等を意識した教育活動を進めることが肝要です。